聖書に親しむ

2017年聖書週間（11月19日～26日）

テーマ：「創造主への賛美」

巻頭言

創造主との語らいへの招き

カトリック広島教区司教　白浜　満

　聖書を手にとって読むことが習慣となったのは、わたしが召命の道を歩み始めるために、小神学校に入った中学生時代からです。旧約から新約まで聖書全体を通読することを目標に、創世記から読み始めました。その冒頭の1章～3章にある天地創造や楽園の物語を読み、中学生のわたしは、そこに描かれている内容の深さを読み取ることができないまま、科学や歴史的な視点から、頭をかしげることが多々ありました。その典型的な疑問の一つは、「神が天地を創造したときのことを誰も、この目で見ていないのに、どうして、このようなことを書くことができたのだろうか？」というものでした。とにかく通読することを目的としていたため、内容に深入りすることなく、ただ読み続けました。

　聖書を読み進めると、人間を導かれる神がご自身を示され、とくにアブラハムを太祖とするイスラエルの民の歴史に介入されます。この神とイスラエルの民（ある時は太祖、預言者、王、祭司、個人、ある時は民全体）の間のさまざまな応答のあり方が実に生々しく描かれています。その生きた体験の中で、イスラエルの民の中に、神こそ、＜生きておられる唯一の真の神である＞という信仰が形成されていきます。そして、ヘブライ人への手紙の冒頭で、「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました」（1・1～2）と言われているように、万物の創造とその相続を含めて、聖書全体の教えが、神の御子であるイエス・キリストに収斂される内容になっています。宇宙の起源、人生観、死後の世界など、膨大な難問が、「道であり、真理であり、命である」（ヨハネ14・6）イエス・キリストのうちに福音を見出していきます。

　聖パウロは、テモテに宛てた手紙の中で、聖書について、次のように教えています。

「あなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」（二テモテ3・14～16）。

　神が、どのような生き方を人間に望まれ、どこへ導こうとしておられるのかという視点こそが、聖書の重要なテーマです。それが、イエスによる啓示のうちに集約されており、そのイエスとの出会いを深めていく手引きである聖書が、わたしにとって人生の最高の宝物となっています。

今年のテーマ：創造神学と現在の科学

サレジオ修道会司祭　山野内　倫昭

創造主への賛美（詩104）

　教皇フランシスコは、私たち人類が暮らしているこの地球を「自分たちの家」と見なし、皆でこれを見守るようにと、回勅『ラウダート・シ』（2015.5.24）を始め、さまざまな機会に呼び掛けておられます。そのお心を受けて、詩編104を祈りたいと思います。詩編のリズムに乗って「創造主」である神を賛美する美しい言葉の流れを心と耳とに納め、それが、特に山や海、夜の空を眺めるときに、自然に口にのぼってくるようになるといいですね。

1． 人類が家族として暮らす家

　こんなに長く人類がここに住んでいるというのに、私たちはこの地球の歴史に少し無頓着です。例えば、地球は、いつ、どのようにして今の形になったのか。周りの色々な山はいつからあるのか。そこの植物や動物の種類は。そして特に、私たちがここにいるのは何故で、宇宙とはどんな関係があるのかなど…それらを、どれほど意識していますか。

　今の地球は人間から、「温暖化」という名の、大きな迷惑をこうむっています。そこに天から魔法の救いの手が伸びて来る、という想像は、甘いです。世界のリーダーたちが責任を持ち、各地域も運動を起こし、一人ひとりが地球をわが家の庭のように大切に面倒を見る意識を持たなければ、もう地球は救われません。

　私たちはここに住み、ここから宇宙を眺め、泣いたり愛しあったり、期待したり、夢を見たりするのです。ここ以外のどこにも、引っ越して行ける別の惑星はありません。私たちがここですべての被造物と共存しあって発展するよう、神は呼び掛けておられます。そのために「物理的・科学的環境と霊的条件」を築き守らなければ、人類が住む場所は滅びてしまう（レオナルド・ボフ、「地球：救いは天から下らない」2008）のです。

2．私たちの家：地球の誕生と成長

　天才アインシュタインが初めて相対性理論を思いついたのは1905年でしたが、そのとき彼はまだ、宇宙とは永遠不変の存在と確信していました。しかし1929年に、天文学者ハッブルが、宇宙は膨張し続けていることを立証したのです。今日では、宇宙には1～2兆の星雲が高速度で広がっていると言われています。宇宙の源であるビッグバンが起きたのは今から137億年前で、地球は45億年前に生まれたと計算されています。そして、数億年かかって地球の動きにより陸と海の形が整っては全滅し、それが数回くり返されたと言われます。地球には今まで3千万種類の生物が現れ、なくなり、また新しく生まれることを繰り返したと、地質学者たちが教えています。そして、人間（ホモ・サピエンス）は、石器時代の少し前、つまり10万年前に姿を現しました。その後、今から1万年前に農業が始まって人口が増加し、紀元前1500年には、人類の人口がもう5億人を超えていました。 聖書に登場するアブラハムは、紀元前1850年ごろにカナンに到着。…私たちに伝わる旧約聖書の歴史背景の始まりです（ヴァチカン天文台、「宇宙を探検する、神学への科学の挑戦」2016）。

3． 創造主への賛美

　この広大な歴史を振り返ったとき、聖書の民である私たちも、天地万物と自分たちが神の言葉によって創造されたのだと気付いて、これを信じます。そして、創造主である神への賛美に生きようとしています。宇宙の広大さと、地球の美しさを前にして、本当に小さな私たちですが、詩編104を唱え、歌おうではありませんか。

みことばを深める

神の栄光を賛美する（エフェソ1･12）

カルメル修道会司祭　九里　彰

　創造主というと、被造物という言葉が思い浮かび、哲学的神学的概念と捉えられがちである。だが、聖書の神は、自然の中に神的現存を感じ取り、八百万（やおよろず）の神を崇（あが）めてきた日本人に縁遠いものではない。

天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。…話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう。（詩19）

　フランシスコ教皇は、回勅『ラウダート・シ』で、自然は神を啓示する一つの本であるとしているが、道元禅師も、『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』の中で次の偈（げ）（悟りの境地を詩で表したもの）をあげている。

溪声（けいせい）すなわちこれ広長舌（こうちょうぜつ）、山色清浄身（さんしきしょうじょうしん）に非（あら）ざることなし。

夜来八万（やらいはちまん）四千（しせん）偈（げ）、他日（たじつ）如何（いかん）が人に挙似（こじ）せん。（「溪声山色（けいせいさんしき）」）

　いっさいのものが大いなる力によって育まれ、互いに関わり合っているという宗教的感覚は、どの民族にもどの文化にも培われてきた。

いったいあなた方は、大空や大地の暖かさをどのように売ったり買ったりするおつもりか。……我々は知っている、大地は人のものではない、人は大地あっての存在である、と。我々は知っている、すべてのものは、一つの家系をつなぐ血のようにつながっている、と。すべてのものはつながりあっている。…人が生命の織物を織るのではない。人は、その織物の一筋の糸にすぎない。（スーザン・ジェファーズ「酋長シアトルのメッセージ」JULA出版局）

　西欧では、近代以降、自然科学の隆盛と共に、この感覚が衰退していった。政教分離はこれに拍車をかけ、神は個人の心の領域に押しやられた。技術革新は大量生産大量消費の社会を現出し、使い捨て文化、すべてをお金に還元する物質主義が浸透していった。山や川、動植物、人や物などの「かけがえのない世界」が消え失せて行った。神との断絶は、人との断絶、自然との断絶をもたらした。『ラウダート・シ』では「地球家族」「宇宙家族」という言葉が使われている。ぶとう園のえのように、人類は自然や社会の管理を創造主である神から託されているにすぎない。

　奥村一郎神父が中川老師（三島龍沢寺、臨済宗）を訪れた時のこと、同行の信者が「禅寺などでは、今も相変わらず、『ナムカラタンノ、トラヤーヤ』とやっておられるのですか」と質問した。老師は静かに問い返された。「蝉の声が聞こえるかな……？」。「寺を囲む森に鳴く、耳をせんばかりの蝉しぐれに、我々もその時はっと気づかされた。『あれじゃ。あの蝉の声じゃ。わあっと力いっぱい鳴いとる。いのちのありったけ叫んどる。あれが祈りじゃ。あんたは、あの蝉のことばわかるか。ことばじゃない。いのちの叫びじゃ。“ナムカラタンノ、トラヤーヤ”、それでいいんじゃ。いのちの限り唱える。まことにありがたい。ナムカラタンノ、トラヤーヤ』」。（『神とあそぶ』女子パウロ会）

良書のすすめと読み方

①聖書とわたし

ロイス・ロック 文 アリーダ・マッサーリ 絵

つばきうたこ 訳　　関谷義樹 日本語版監修

2017年　ドン・ボスコ社　1400円＋税

アリーダ・マッサーリによる聖書絵本。旧約・新約聖書から、神さまによる救いの歴史を知る20の話が、聖書に忠実かつやわらかな言葉と絵で表現されています。それぞれの話の終わりに、聖書を引用した祈りが付いていて、要理として子どもに読み聞かせたり、聖書の入門書として読んだり、絵と物語を味わって黙想することもできます。総ルビ付で、対象は小学校低学年から大人までさまざまな楽しみ方ができます。

②DVD　知っておきたい聖書の常識シリーズ

解説：ガエタノ・コンプリ（サレジオ会）

旧約聖書編（1714円＋税）2007年

新約聖書編（1714円＋税）2007年

新約聖書編II（2枚組　3000円＋税）2016年　ドン・ボスコ社

聖書の世界を見て、聞いて、学べるDVDシリーズ。世界一のベストセラーと言われる聖書は、世界の歴史、文化、芸術、思想を知るためにも、まさに必読の書物です。しかし、読み方の基本がわからず、途中で挫折してしまう方も多くおられるようです。このDVDシリーズはそうした方をはじめ、聖書を読まれる方に、わかりやすいQ&A形式と、随所に織り込まれた関連写真や絵画を通してコンプリ神父が聖書を解説します。旧約聖書編では「聖書とは」から始まって、創世記からキリストまでを解説。新約聖書編は福音書を中心にイエスの生涯、受難と死と復活までを解説。新約聖書編IIでは、使徒言行録、手紙、黙示録、最後に聖書の成立と教会の関係について解説されています。

③大地と祈り

写真・編　関谷義樹（サレジオ会）

2012年　ドン・ボスコ社　1300円＋税

今年の聖書週間のテーマ「創造主への賛美」に合わせてこの写真集を紹介します。神が造られた自然はそのままで神を賛美しています。そして人間は自然を通して神を観、また自然とともに神を賛美することができます。この写真集では、日本の自然の風景写真に、聖書の一節や聖人たちの言葉を添えています。神の被造物である自然と、同じく被造物である人間が、ともに創造主である神を賛美するというコンセプトで、「大地と祈り」というタイトルになっています。

◆編集後記◆

今年の聖書週間のテーマは、フランシスコ教皇の回勅 「ラウダート・シ」を受けて「創造主への賛美　（詩編104）」といたしました。世界全体で取り組まなければならない課題であるにもかかわらず、足並みが揃わない現状を鑑みると、詩編104に詠まれるテーマはわたしたちへの切実な呼びかけです。わたしたちが詩編104を通して、創造主への祈りと賛美を味わうことができますように。

ご執筆いただいた白浜　満司教様、山野内倫昭神父様、九里　彰神父様には素晴らしい文章をいただきありがとうございました。美しい写真で今年のポスターをお作りくださり、また良書をご紹介くださったドン・ボスコ社関谷義樹神父様並びにスタッフの皆さまに心より感謝申し上げます。

◆献金のお願い◆

この「聖書に親しむ」は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いでございます。その際は、下記へご送金くださいますようお願い致します。

振込先：　郵便振替　00130-6-36546　（宗）カトリック中央協議会一般会計口